

RadioDays



ラジオデイズ

声には、
人の体温があり物語がある

月刊「ラジオデイズ」1月号（通巻第8号）
2007年12月28日発行
【発行人】赤塚祐一郎
【編集人】大森美知子
【発行所】株式会社ラジオカフェ
東京都新宿区新宿1-6-5 シガラキビル 6F
Email: info@radiodays.jp FAX: 03-5356-8281
http://www.radiodays.jp

1

January Edition
2008, vol.8
Free of charge

この人の声が聴きたい◎1月

関川夏央さん（作家）

ソウルの地下鉄で読み続けた本 あるいは、何故ひとは 関川夏央を読みたくなるのか

「ある時期から、関川夏央の書くものならなんでも読むようになった」、たしか、こんなことを高橋源一郎が書いていたと思う。なんということのない一行だが、私には高橋さんの気持ちが良いわかる。私も同じように、折に触れて関川夏央の文章を読みたくなるのだ。いや、疲れたときにチョコレートが食べたくなるように、自分の中の欠落した何かが、関川夏央の文章を要求するのである。

「こういう場合、彼ならどう考えるだろうか」と思って開く本というものがある。いわば、人生の指南書のようなものである。たとえば、それは中国に関する竹内好だったり、経済に関する岩井克人だったり、歴史に関する網野善彦だったりする。関川夏央は、そのような啓蒙的な先導者ではない。もちろん、政治的なプロパガンディストでもないし、アカデミシャンというわけでもない。それでも、やはり、無性に彼の文章を読みたくるのである。それが何故かということについて、私は明瞭な答えを持ち合わせてはいない。自分の身体的な欲求が何によって生まれてくるのかを説明するのが難しいように、関川夏央の文章の魅力というものを説明するのは難しい。なぜなら、それを言い当てるためには、私の中の欠落したものが何であるのかを説明しなければならぬ。つまりは不在を証明するようなことだからである。

少し前に仕事でソウルに行くことがあった。私にとってははじめてのソウルであった。旅



行の準備のため鞆に仕事の書類や衣類を詰め込んで、さてと本棚を見渡した。そして、一冊の文庫本を鞆に放り込んだ。関川夏央の『家の前兆』（文春文庫）である。何故かソウルには、関川の本が相応しいように思えたのだ。勿論私は『ソウルの練習問題』の熱心な読者であったので、ソウルと聞いて関川の名を反射的に思いついたということもあつたらう。しかし、それだけなら他にいくらでも作家はいたはずである。私にとっては、関川夏央でなければならぬ理由があつた。

しかし、その理由についても、私は、明確に答える根拠を持たない。ただ、日本のそれに比べて薄暗いソウルの地下鉄に揺られながら、下車する駅も忘れてその本を読み耽つた。ソウルの街並みは、私に何十年前の東京を思い出させた。昭和三十三年の東京オリンピック以前の東京である。日本はこれを境に、急速な経済発展を遂げ、街並みの風景も一変した。私たち日本人は、この経済の成長から多くの物質的繁栄を得た。失つたものも確かにあつたはずであるが、何を失つたかは忘れてしまったのかもしれない。私（たち）が、折に触れて関川夏央の書いたものを渴望する理由をもし、ひとつだけ挙げよというなら、そこに私（たち）が失い、再び手にすること不可能であるものに触れることができるからだと言いたい気がする。つまり、かれは私（たち）の時代の「不在」の証人なのである。

（ラジオデイズ・プロデューサー 平川克美）

ラジオデイズは、文芸・対話・話芸を三本の柱に、声のもつ魅力に特化した音声コンテンツを制作し、ダウンロード販売するWebサイトです。

飄逸で含蓄のある随筆、瑞々しい感性の横溢する詩歌や小説の朗読、個性的な対話者たちの真摯な言葉の応酬から生まれる知的交歓、粋と人情の落語や講談などなど、大人のお楽しみにたえる魅力的なコンテンツが満載です。

ただいま入会随時受付中！

会員（会費無料）になられると、月替わりで期間限定の無料コンテンツがお楽しみいただけます。また、抽選で素敵なプレゼントもご用意してお待ちしております。サイトでは、声の魅力を凝縮したコンテンツのすべてがで聴取できるほか、演者のプロフィールやコラムなど読み応えも十分です。どうぞお立ち寄りを！

<http://www.radiodays.jp>

対話の街からは、内田樹のダイアログ・シリーズをリリース。小林秀雄賞を受賞された気鋭の思想家・内田樹氏と、悪ガキ時代からの盟友ラジオデイズのプロデューサー・平川克美とともに、錚々たるお客をお招きして語り尽くします。ただいまは脳医学者の養老孟司さんとの対談「概念化する世界の読み方」の第一章が、無料ダウンロードできます。今後は音楽家の大瀧詠一氏ほか魅力的な「刺客」が続々登場！ 鉄道ものもご期待！

文芸の街からは、作家の大岡玲さん、関川夏央さん、小沢昭一さん、詩人の清水哲男さんなど多彩な解説者を迎えた名随筆のアンソロジー「声のエッセイ」コレクションが評判を呼んでいます。また、「声の詩集」シリーズからは、女優の鳥丸せつこさんの朗読、詩人の正津勉氏がナビゲートする「詩人の愛」I・IIをお届け中。サイトでは、川端康成賞作家でもある詩人の小池昌代さんのコラム「言間小路」も好評連載中。

話芸の街からは、ラジオデイズ収録の新鮮なオリジナル音源百五十本余をお届け中。時代に磨かれた古典を自家楽館中に現代に演じきる斬家たち。そして、時代の流れから湧き出た、かつて語られたことのない新作に鎌を削る斬家たち。ライブ音源だけに一期一会の斬に出会えます。不定期でラジオデイズイチョウの斬家さんの演目を無料ダウンロードにて提供していきますので、毎日覗きにきてください。まずは、試聴ボタンを。

●第9回 オリンパスシンクする寄席

【日時】1月12日(土)午後6時45分開演(午後6時15分開場)

【場所】お江戸日本橋亭(半蔵門線 銀座三越前)

すべての落語は新作として生まれ、生き残ったものが古典になる……、そんな過酷な道に進んで身を捧げる人々がいます。それは新作落語の演者です。時代の流れから生み出された一席の噺を、口演を重ねながら書き換えていく。そんな現代の落語ばかりをコレクションしました。毎回二人の演者が新作落語を中心に二席ずつ競演します！

柳亭市馬

りょうてい いちば

柳亭小さん門下。平成五年、真打昇進、「柳亭市馬」を襲名。威風堂々その高座から演じられる「かぼちや屋」などの落語は登場人物がいきいきと描かれており、その芸はまさに柳亭の本道を行く。また落語界で1、2を争う美声の持ち主で、その声は三波春夫に勝るとも劣らない。



三遊亭好二郎

さんゆうてい こうじろう

三遊亭好楽門下。平成十四年、二ツ目昇進、「好二郎」と改名。圓楽一門の期待の星であり、落語界期待の若手。古典から新作まで様々な噺に挑戦し、若手らしいみずみずしさを表す一方、芸には破綻がなく、噺の運びなどは堂々と落ち着いている。



明烏い話

連載第9回

本田久作



正岡子規は俳句を芸術にしてみました。そのことで今でも子規を非難している人がいる。そういう人たちの気持ちもわからないでもないが、私は子規が好きないせいか、子規が俳句を芸術にしてみましたことに特にこれといった不満は感じない。安藤鶴夫は落語を芸術にしようとして、それに失敗した。そのことをいまだに惜しいと思っ、アンツルを懐かしく思っている人がいる。そういう人たちの気持ちもわからないでもないが、私は安藤鶴夫が好きではないせいか、彼が落語を芸術にしようとして失敗してしまいましたことには欣快を覚えずにはいられない。あの時、安藤鶴夫が落語を芸術に変えていたら、おそらくこの二十一世紀には落語は残っていなかっただろう。

とはいえ、安藤鶴夫がそうとう奮闘したことは認める。認めるが、それでも実際にはアンツルは落語界の子規にはなれなかった。それにはいくつもの理由がある。まず第一に、当時の噺家たちは安藤鶴夫が思っていたよりかはるかに聡明だった。その聡明さが落語を芸術にすることの危うさを気づかせた。そし

て第二に子規が理論家兼実演者であったのに対して、安藤鶴夫はあくまでも理論家でしかなかった。アンツルは実演の方は三木助と文楽に任せてしまったのだ。だが、安藤鶴夫がどれほど三木助や文楽の芸を指して芸術呼ばわりしようとも、また三木助が一時の気の迷いでアンツル理論にどれほど影響を受けようとも、文楽は文楽であり三木助は三木助であって、アンツルではない。であれば、安藤鶴夫自らが「これぞ、私が主張する芸術としての落語である」という現物を聞かせてくれなければ、噺家は納得しないし、客はもつと納得しない。アンツルは『わが落語鑑賞』でそれをやったつもりになったのだろうが、あれは文楽三木助可楽からの借り着であって安藤鶴夫自身の作品ではない。おまけにあの『わが落語鑑賞』以後、文楽も三木助も変わっていった。これは逆の例になるが、三木助の『芝浜』の枕で言うあの噴飯ものの台詞「翁の句で、『わが落語鑑賞』の時期はまだ「芭蕉の句」となっている。私からすれば無駄しかない三木助の芝の浜の海の描写を絶賛していた安藤鶴夫ですら、後年三木助が口にした「翁の句」を聞いた時は苦笑したのではないだろうか。それとも、あれこそ落語が芸術となった証左としたのであろうか。

さらに文楽もまた『わが落語鑑賞』以後、大きな変化を遂げている。文楽の場合はさらに完成度を増していったわけだから、安藤鶴夫の理想とした芸術落語に近づいたかに見えるが、そうではない。文楽にとつての完成度とは、客にとつてのさらなる聞き心地のよさを目指したものである。自分の作品の基準を自分自身におかずに鑑賞者におくものを芸術とは呼べないだろう。

安藤鶴夫は非常に真面目な人である。そし

て真面目な人は困った人でもある。だいたい、扱いに困る。落語ぐらい真面目に聞けよ、とは私も思うが、実際に真面目に落語を聞いている人を見たら、それはそれで困ってしまう。そして安藤鶴夫は本当に真面目に落語を聞いた人であった。そのこと自体は悪くはないのであるが、しかしそれはいささか野暮なことではあったのだ。

●ほんだ・きつうさく

一九六〇年大阪府市、ライター。二〇〇二年の「仏の遊び」が国立演芸場日本舞集佳作受賞以来、落語、漫才など新作日本関係の賞を毎年総ナメの業界注目の新進作家。主な受賞作「玉手箱」(国立演芸場日本舞集優秀作)「儂の舞式」(探摩の夢)「幽霊蕎麦」(いずれも落語協会優秀作)など。



私の讚太ばなし 八

古今亭志ん五

き 『おかふい』

イヤな噺 NO.1

ねえ、鼻を食べちゃうなんて気持ち悪いでしょ！

式 『井戸の茶わん』

好きな噺 NO.1

聞いた後、清々しい気分になるでしょ！

参 『唐茄子屋政談』

やりたいがやれずにいる噺 NO.1

これはネエ、吉原たんぼの件が、ちよっとひっかかるんです。歌のところがネエ。師匠の志ん朝と大師匠の志ん生の素敵な歌を聴いているから……、ムムという感じなんです。

第9回 ラジオデイズ落語会

〔日時〕1月19日④午後2時半開演（午後2時開場）
〔場所〕コア石響（四ツ谷駅徒歩7分）

江戸時代から明治時代に作られ、数多の噺家によって高座にかけられ、時を経て世相に洗われて、そして語りつがれてきたのが古典落語。それを自家菜籠中に演じきる現代の噺家たち！ 人情の機微に触れ、免疫力増進の涙と笑いの宝庫、至福の話芸の真剣勝負。開口一番は、毎回気鋭の二ツ目さんにお願ひします。

柳家小ゑん

◎なまきり・えん

柳家小さん門下。昭和六十年、真打昇進。独自の落語哲学を持ち、その存在は「新作落語」の分野において必要不可欠な存在。また「ブラネタリウム落語会」など落語の可能性を探る活動を積極的におこなっている。



柳家喜多八

◎なまきり・きたはち

柳家小三治門下。平成五年、真打昇進。「喜多八」と改名。「清く、気だるく、美しく」をモットーに印象的な立ち振る舞いで高座に現れる。「たけのこ」などの演者の少ない珍しい噺をやるなど、その芸域は広く深い。また、言葉に力があり武士の出でくる噺などは迫力がある。



◎お囃子 太田その

◎おわたその

鈴々舎わか馬

れいれいしゃ、わかば



鈴々舎馬桜に入門。平成十二年、二ツ目昇進。平成十八年、鈴々舎馬風門下に移門。上品で軽い持ち味を生かした高座で現在成長著しい二ツ目。「千早振る」などの細部を膨らませていく噺に定評があり、そのほんわかした雰囲気は落語の世界に溶け込んでいる。

こみちが行けば

女流二ツ目の修行日乗⑦

柳亭こみち

「老けた手！」修行中私の手を見た人が驚いた。前座時代の私の手は、アカギレだらけの血だらけで、若さのかけらもなかった。柳家に手の綺麗な前座はいない。前座の手荒れは営業マンの水虫と同じ。修行時代に手が荒れた人は出世する。とも言われ、勲章とばかりに手が荒れる。

娘時代の私の手は、誠に美しかった。ハンドクリームをのべつ塗り、指輪とマニキュアを煌めかせ、デーの日には指の毛を抜いて臨んだ。でも噺家になれば美しい手とは無縁。熊さん八つあんにマニキュアは有り得ない。人前でクリームなど塗ればへ仏こんなに頑張ってます」と、押しつけがましい行為にもなる。クリームを師匠の着物に付けてもいけず、塗っても絶え間ない水仕事ですぐ落ちてしまう。噺家の証が刻まれた強く温かい手を、燕路を見て私は知っていた。

ところがある日、あまりの手荒れで茶屋のネタ帳に血を付けてしまった。しまった！ 血が出ないようにクリームを擦り込んでいたその時、「前座さん、これで蕎麦でも」と、ある師匠がお小遣いを下さった。さすがお札を言う私。その手は揉み手をしている……。「こら！ 手を揉みながら金をもらう奴があるか！」どんなに手が荒れようと、やはり前座にハンドクリームは禁物だと知ったのだ。

◎りょうてい・こみち

社会人生活を経て、平成15年柳亭燕路に入門。18年11月二ツ目昇進。趣味はピアノ、ギター、ウクレレ演奏。特技は日本舞踊。蕎麦流を習（蕎麦妻業）。落語協会野球部・チームR所属。

味な脇役・話芸のきまり文句

連載第8回

色恋



松井高志

「色」と「恋」とはどう違うのか、というふうなやややこしい蘊蓄は、このコラムにそぐわないのであえて深く追わず、ここでは「色恋」＝恋愛と、いささか乱暴にひとくくりにとめてしまいたい。

落語にも講談にも、色恋のために我を忘れて暴走する人物が数限りなく出てくるが、たとえば「籠釣瓶」講談でいう「吉原百人斬り」の佐野次郎左衛門や、落語「たちきり」で蔵に閉じこめられてしまう若旦那みたいに、その行いがいかに極端な、常識外れなものである、

色は思案の外

（同義で「恋は思案の外」「色は心の外」ともいう。）だから、客はその成り行きを納得しなければならぬ。つまり、誰にも身に覚えのある諺でもって、プロットの飛躍を正当化している。古来の言い回しを引用して、「そんな奴あいねえ」と客に思わせないようにしているのである。

若き男の色好まざるは、玉の盃底なきに似たり

というような「色恋のすすめ」を意味する文句（「徒然草」三段による）も、たびたび引用される。たとえば赤穂義士が周囲の目をあざむくため、わざと放蕩してみせる場面などである。

講談「旗本五人男」のうち、あらぬ色情に溺れて破滅する旗本・座光寺源三郎の行状を描いた「おこよ源三郎」を実録小説化した「月籠玉の輿」という物語では、この文句について、

「情慾を好めとは非ず、色とは眞實の心を言なり、然るを世の人心得違ひして色好みとは情慾の好みを言へる事と思ふは誤りぞかし」と注釈を施している。源三郎の破滅を我が身の戒めにせよ、という筆者（匿名）のお説教が実に押しつけがましいのであるが、おそらく当時もひたすら興味本位だったであろう大部分の読者たちは、こんな「好色」という語の「正しい」解釈など、ほとんど意に介さなかつたはずである。

◎まつい・たかし

一九六〇年愛知県生、月刊誌編集者を経てフリーライター。著書に『半四郎の出世・十右衛門の背徳』（メタ・ブレーン）、『人生に効く！ 話芸のきまり文句』（平凡社新書）など。『話芸のきまり文句』辞典「サイ」
http://wagidom.com/ogp-rity.com/

ラジオデイズ落語会

(毎月1回土曜昼開催)

【会場】コア石響(四ツ谷) 【入場料】2,500円

【時間】午後2時半開演(午後2時開場)

●第10回 2月2日④

柳家小満ん 橋家田太郎 古今亭菊六

●第11回 3月1日④

橋家文左衛門 柳家三三 春風亭一之輔

※ご予約申込開始は各回前月1日から、ラジオデイズURL <http://radiodays.jp> もしくは、予約受付専用電話〇三―三三―四一―一三〇より、先着順です。

オリンパスシンクする寄席(毎月1回不定期)

【会場】お江戸日本橋亭 【入場料】2,000円

【時間】午後6時45分開演(午後6時15分開場)

●第10回 2月28日④

二遊亭円丈 柳家小ゑん

●第11回 3月14日④

古今亭寿輔 古今亭錦之輔

※ご予約は、オフィスMs〇三―五七―二一五三三五まで

ラジオの街で逢いましょう

ラジオデイズでは、声と語りの魅力を求めて、深夜のラジオ番組も制作・放送しています。

お相手は、ラジオデイズプロデューサーの平川克美、菊地史彦、大森美知子、そして大阪はTBSの辣腕エディター江弘毅が務めます。これまでの放送分は、ラジオデイズサイトにてストリーミング放送中です。どうぞ真夜中の語りい耳を傾けてみてください。

<http://www.radiodays.jp>

ラジオ関西 毎週火曜日の深夜24時半から午前1時まで。

今後の放送予定(深夜のお客様)

1月1日 古今亭志ん五(落語家)

8日 伊藤文学(歌人、作家)

15日 久坂部羊(医師、作家)

22日 桃井和馬(写真家)

29日 井上久男(ジャーナリスト)

師走の落語会ふたつ

ラジオデイズ落語会(12月14日)は赤穂浪

士討入りの日の開催、お待ちかね柳家喬太郎師匠と隅田川馬石師匠が登場。開口一番は柳家小三治門下三之助さん。長屋のガキ共と遊ぶお坊ちゃんや金の黒大黒様を拾うネタは「黄金の大黒」。祝いに駆けつける長屋の住人たちの演じ分けはお見事。

続いて喬太郎師匠登場。人だかりのなか、粗忽な男が行き倒れを兄弟分だと錯覚、当人を連れて来ると飛び出す。茫然とする本人に「お前は死んでるよ」。柳家伝統の「粗忽長屋」で笑いのなかにシュールな味を醸します。次は華がある二枚目の馬石師匠。金が欲しいと寝言をいう船頭、娘連れの侍に酒手はずむからと頼まれ雪降る大川に漕ぎだす。ネタは「夢金」。じつは侍、急な癪で倒れた娘を助け

たが懐の大金に目が眩み船頭に娘殺しの手伝いを持ちかける。師匠雲助譲りのメリハリの利いた噺っぷり、良質な芝居を見るようだ。仲入り後も馬石師匠。犬が願掛けして人になるが頭の中は犬のままという設定から話はやや妙な展開へ。ネタは「元犬」。軽い噺も上手いね、このしとは。トリはもちろん喬太郎師匠。ネタはこれも柳家伝統三代目小さんが有名な「うどんや」。しんしんと寒さが身に沁みる冬の夜、「なーべやーさうどん」と売り声が響く。情景と人物描写の細やかさに脱帽、江戸の街並みや見たこともない担ぎ屋台のうどんやが脳裏に浮かぶ。これも芸の力、恐るべし。

一方、オリンパスシンクする寄席

(12月14日)は、なんとラジオデイズ落語会と同日開催。同時に見

ることはできずライブ録音での鑑賞。ベテラン瀧川鯉昇師匠と若手三遊亭天どんさんの対決。

創作落語の王者三遊亭円丈師匠の弟子の天どんさん、新作で不思議な境地を開く実力派初めのネタは「再編家族」。世は企業合併再編時代、世間の荒波を乗り越えるため家族も合併再編に。父は副父さん、長男は次男から犬に降格? もう一つ「クリスマス夜の夜」。サンタクロースの扮装をした人のいい泥棒、一仕事を目論むが……。客は納得大笑い。

鯉昇師匠は「家見舞い」、とぼけたマクラで笑いを誘い自然とネタに入ります。兄貴分の新築祝いに行き、ただ酒にありつこうという二人組、掘り出した肥瓶を買い水瓶と偽って持つて行くが……。馬鹿馬鹿しくも強引な面白さ。トリも師匠で「二番煎じ」。火の用心の夜回りをするご近所同士、「火の用心」が売り声や小唄謡曲に。番小屋での楽しみみ猪鍋で酒盛り中、役人が現れ大慌て……。抜群の表現力できつちり古典を味わえました。いやー落語は面白い。(ラジオデイズ寺和尚)

オリンパスシンクする寄席の"楽屋口(〇〇)"

シンクする寄席オリジナルコンテンツ"楽屋口(〇〇)"が携帯電話からお楽しみいただけます。



まずは、左の2次元バーコードを携帯のカメラで写してあらかじめ無料画像認識アプリ Sync ★ R (シンクする) をダウンロードしてください。

QRコードを撮影、または a@gwmj.jp (オリンパスのシンク★R公式サイト) に空メールを送信すると、ダウンロード先 URL が記載されたメールが返信されてきます。つぎに、Sync ★ R (シンクする) アプリを起動して、各ページにあるマークを携帯のカメラで撮影して保存・送信すればOK。オリンパスシンクする寄席のチラシのマークでもラジオデイズのお楽しみコンテンツをお楽しみいただけます。※このとき、それぞれのマークの全体が入るように、ピントが合うところまで離して撮るようになりますのがスムーズにダウンロードするコツです。どうぞ、お試しあれ!

シンクする (Sync ★ R) とは?

オリンパス株式会社の開発による、先進の画像認識技術に応用したカメラ付き携帯電話用アプリのこと。新聞・雑誌などの紙面やテレビ画面上の画像を撮影するだけで、モバイルサイトへのアクセスを可能にします。

ラジオデイズの窓から

訪れる人も少なく、ひと際澄んだ空気が流れている冬枯れの新宿御苑。静まりかえった苑内では、白木蓮の木が、銀色の柔らかな毛で花芽を包み込み、冬支度を終えていた。今春も、きれいな花を咲かせてくれますように。ラジオデイズの事務所にも次々と「声」の花をたくさ蓄が。今年もみなさんに「声」の花をたくさんお届けできるよう、スタッフ一同、冬の樹木のごとく、黙々と作業に勤しんでいます。

